

天理大学には、学内の学術・研究・教育活動を奨励する助成制度があるが、今年2月、その規程が改正され、天理市や奈良県（関係機関を含む）と共通で設定した課題の解決を目的とした「地域課題研究助成」を新たな種目に加えた公募が行われることになった。そこで考古学・民俗学専攻では、さっそく、天理市文化財課との共同研究「天理市杣之内町とその周辺地区における文化遺産の保存・活用を通じた学習と交流の空間デザインのための基礎的研究」（研究代表・丸山泰明）を企画し、上記助成に申請を行ったところ、審査を経て、幸いにも採択を受けることができた。



共同研究に関する天理大学側の課題は次のとおりだ。大正14年（1925年）に創設された天理大学は、2025年、創立100周年を迎えるが、杣之内キャンパスには、旧外国語学校本館（現1号棟）、創設者記念館、天理図書館など、文化財としての価値をもつ近代建築が点在するほか、国史跡に指定された西山古墳などが存在し、電線が地下埋設された良好な環境と合わせ、文化の香りが漂う空間となっている。しかし、その価値が十分に調査・認識され、保存・活用が図られているとは言いがたい。昨年9月、日本学術会議が提言した「我が国の大学等キャンパスデザインとその整備システムの改善にむけて」では、知的創造の場として魅力あるキャンパスを整備し大学の国際的競争力を高めていくための方策として、都市・地域との連携をはかり観光拠点・散策拠点となるポテンシャルを上げていくこと、歴史的建築物や大学博物館などを通じて歴史を継承し地域の顔として風格のあるキャンパスを整備することが提唱されている。研究助成の申請に際して丸山氏が強調したように、文化遺産と融合したキャンパスは、学生や教職員のみならず、大学を地域へと開き、住民・観光客に学びと憩い、交流の場を用意するとともに、さらには、未来の学生となる受験生や留学希望者にも大学の魅力をアピールするものなのだ。そうした空間をデザインすることが地域に貢献する大学として求められている。

一方、天理市側の課題はこのようだ。昨年11月17日に開催された国の文化審議会において、天理市杣之内町に所在する西乗鞍古墳を国の史跡に指定する答申が行われ、すでに史跡指定されている西山古墳とあわせて、「史跡 杣之内古墳群」とすることとなった（正式指定は今年2月13日）。文化庁は史跡指定後には地方公共団体・所有者等が「保存活用計画」を策定して、保存・活用の基本方針を示すことを求めている。将来的な「保存活用計画」の策定を見据え、学校法人天理大学敷地内の古墳を含む杣之内古墳群の保存・活用に向けた課題を洗い出す必要が生じている。

また、本共同研究の課題は、文化審議会による答申「文化

財の確実な継承に向けたこれからの時代にふさわしい保存と活用の在り方について」（昨年12月18日）を踏まえ、今般の第196回国会において、6月1日、文化財保護法の改正案が可決・成立し、来年4月1日から施行される運びになったこととも密接に関連する。文化財保護法が始まって以来の変革と言われる今回の改正では、地方公共団体は、未指定も含めた域内の文化財を把握し、地域で協力して総合的にその保存・活用に取り組むこと、市町村は、地域の文化財に関するマスタープランとして文化財の総合的な保存・活用に係わる計画（「地域計画」）を策定することなどが盛り込まれている。本研究の成果は、いずれ、この「地域計画」を策定する上でも有用となるだろう。

折りしも、奈良県は天理市杣之内町に奈良県国際芸術家村を平成32年度（2020年）中に開設することをめざし、天理市は、天理大学杣之内キャンパスを含む一帯を「芸術文化エリア」として活性化をはかる企画案を昨年11月8日に開催された芸術家村構想等検討委員会に提出している。天理大学と国際芸術家村の周辺に点在する文化遺産を一体的に捉え、キャンパスの内外を超えた学習と交流・憩いの空間を創出することができるならば、これはまさに、「地域の課題に適切に対応し、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与する」という天理市と天理大学の包括連携協定の目的にも合致している。

研究の開始に当たり、4月23日に行われた打ち合わせ会では、天理大学・天理市等の関係者から成る共同研究のメンバーが初めて一堂に会し、研究会の略称を「文化遺産と大学キャンパス」とすることが決まった。5月28日の第1回研究会では、吉村綾子氏（天理大学広報・社会連携課・大学史担当）が、「天理大学の変遷—歴史的建造物を中心に—」と題した報告を行い、当時の資料や写真を示しながら、外国語学校本館（現1号棟）の周辺に、少しずつ必要な建築物が建てられ、今日の杣之内キャンパスが形成されていった経過を振り返った。『ふるさと会報』によれば、昭和2年（1927年）頃は、校舎といえば、本館だけで図書館、寮、道場等はなく、周囲の寂しい風景の中でぼつんといかめしく大和平野を見下ろしていた状況だったという。東側の山塊から張り出した舌状の丘陵地には、今も残る西山古墳、塚穴山古墳のほかにも、小さな古墳が点々と存在していた。教職員、学生、市民の学びの場である杣之内キャンパスには、古墳に象徴される古代、学校建築に象徴される近代が同じ空間内に重なり、同居しているのだ。文化遺産それ自体の価値、および文化遺産の保存・活用法について研究を行い、空間をいかにデザイン



写真2 西山古墳前方部から杣之内キャンパスを望む

していけば良いのかについて構想するための基盤を形作ることをめざす今回の共同研究では、杣之内キャンパスが持つ歴史的な特徴を十分に認識しておくことがまず何よりも重要だ。